

Title	笑い表情の精神生理学的研究 : 笑い誘発刺激およびインタビューに対する精神分裂病者の反応
Author(s)	河崎, 建人
Citation	大阪大学, 1989, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36658
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【53】

氏名・(本籍)	かわ	さき	たつ	ひと
	河	崎	建	人
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	8469	号	
学位授与の日付	平成元年	3月	2日	
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	笑い表情の精神生理学的研究 —笑い誘発刺激およびインタビューに対する 精神分裂病者の反応—			
論文審査委員	(主査) 教授	西村	健	
	(副査) 教授	最上平太郎	教授	白石 純三

論文内容の要旨

〔目的〕

表情の硬さ、動き等は情動状態を鋭敏に反映するものとして、精神医学領域、特に精神分裂病者の診療にとっては重要な要素である。しかし表情に関する研究は心理学的、精神病理学的なものが多く、表情を精神生理学的にとらえ客観的に定量化し精神分裂病者における情動障害を生理学的に解明しようとする研究は数少ない。

本研究では情動の中でもその識別が他の情動に比べて容易でかつ表情の持つ役割の一つであるコミュニケーションという側面において重要な機能をはたしている笑いに焦点をあてた。そして笑いを顔面表情筋筋電図を中心としたポリグラフィー記録で客観的、総合的にとらえ、精神分裂病者の情動障害の精神生理学的側面を明確にし、さらに精神分裂病者のコミュニケーション障害も精神生理学的な方法で明らかにすることを目的とした。

〔方法〕

対象はDSM-Ⅲにより精神分裂病と診断された精神分裂病者24名(解体型12名、妄想型12名)で正常被験者34名を対照群とした。

笑い誘発刺激としてビデオテープに録画した51分間のTV喜劇番組を用い、その際の笑い反応を大頬骨筋筋電図、GSR、指尖容積脈波、音声、呼吸曲線、体動によりポリグラフィー記録した。その記録をもとにして笑い反応の強さを客観的に評価し laughing score とした。同時に隣室よりTVカメラを通して被験者の笑いの表情を観察し検者による主観的評価も行った。笑い誘発刺激終了後検者により16項目のインタビューを施行し、その際の笑い反応を大頬骨筋筋放電よりとらえ、非言語的コミュニケーションと

しての笑いも評価した。

笑い誘発刺激は同一被験者に対して単独で視聴する場合と2人の検者と共に複数で視聴する場合の2つの検査条件下で与えられた。これは他者の存在あるいは周囲の笑い声が被験者の笑いにどのような影響をおよぼすかを検討する目的で行った。

〔成 績〕

1. 笑い反応のポリグラフィー記録からの客観的評価である laughing score と検者による笑いの主観的評価との間には、正常者、精神分裂病者のいずれの群においても高い相関があり本研究における方法の妥当性が実証された。
2. 精神分裂病者では正常者に比して laughing score が著明に低く、精神分裂病者での情動障害の存在が精神生理学的に裏付けされた。また正常者では加齢に伴い laughing score が有意に減少したが、精神分裂病者では年齢との相関は認められなかった。
3. 精神分裂病者の病型別で比較すると解体型では妄想型に比して laughing score が低い傾向を認め、解体型での情動障害がより重篤である可能性が示唆された。
4. 正常者では複数で笑い誘発刺激を視聴した場合、単独に比べて有意に laughing score が増加したが、精神分裂病者では笑いの増加は認められず、解体型では減少する傾向があった。このことは精神分裂病者特に解体型でのコミュニケーション障害の存在を示唆した。
5. インタビューに対する笑い反応に関しては精神分裂病者は正常者に比べて有意に反応が乏しく、精神分裂病者での非言語的コミュニケーションの障害が客観的に認められた。病型別では解体型が妄想型よりもインタビューに対する笑い反応が乏しい傾向があった。
6. 精神分裂病者では laughing score、インタビューに対する笑い反応のいずれも罹病期間およびクロールプロマジン量に換算した薬物量との間に相関は認められなかった。

〔総 括〕

本研究では笑いという一つの情動を顔面表情筋筋放電を中心としたポリグラフィー記録により客観的、総合的にとらえ、精神分裂病者の情動障害を精神生理学的に明確にした。さらに笑いの持つコミュニケーション機能を分析することにより精神分裂病者での非言語的コミュニケーションの障害を明らかにした。この精神生理学的研究法が精神分裂病者の情動障害、コミュニケーション障害の解明および診断に有力な手段であり、さらに今後うつ病等の他の精神疾患の情動障害の解明にも有用であると考えられる。

論文の審査結果の要旨

精神分裂病者の情動障害については、これまで主として主観的評価がなされており、情動障害を客観的、定量的にとらえ精神生理学的にその病態を解明しようとする研究はほとんどなされていない。

本研究では情動の中でも、その識別が他の情動に比べて容易でかつ表情の持つ役割の一つであるコミュニケーションにおいて重要な機能をはたしている笑い表情に着目し、笑いをポリグラフィー記録で客観的、

総合的にとらえ、笑いの指標として用いることができる laughing score を考案した。この方法を用いて笑い誘発刺激およびインタビューに対する精神分裂病者の反応を定量的にとらえ精神分裂病者では laughing score が著しく低いこと、及び他者の存在のもとでは精神分裂病者の laughing score が、正常者のように増加を示さないことを明らかにした。

これらの結果は精神分裂病者の情動障害およびコミュニケーション障害を精神生理学的な手法で客観的に明確にしたものである。またこの精神生理学的研究法が精神分裂病者の情動障害、コミュニケーション障害の解明および診断に有力な手段であり、今後うつ病等の他の精神疾患の情動障害の解明にも応用が可能であり、本論文は学位に値するものと考えられる。